

結果補語構造「V見」の發生とその變遷

伊原大策

一 はじめに

「見」が動詞の後ろに位置して補語構造を構成する時、それはしばしば「知覺が認識されたことを示す」ものと定義される。例えば中國で編纂されたある文法書は「見」について「表示感覺到」（感じとられたことを表わす）と述べる。¹⁾ 日本で編纂されたある辭典も「感じとる」意味を示す」と説明し、さらに言葉を續けて「多くは視覺・聽覺・嗅覺などについて用いる」と補う。²⁾ この補足は、中國で編纂された右記の文法書の記述におそらく倣ったものだが、こうした念の入った解説が付加されるのは、「感じとる」と定義するだけでは不十分と、編者が考えているためであろう。

また、別の辭典は「感覺の出現を表わす」とも説明する。³⁾ (ここで)とさら「感覺の出現」という不自然な表現が採用されるのは、「見」が持つ「現」の機能に通じる用法である⁴⁾、編者によって認識されているためであろう。補語の「見」に合理的・統一的な解釋を示そうとする編者の工夫の痕跡を、ここにも認めることができる。

視覺を示すはずの「見」が聽覺や嗅覺を示す動詞とまで結合する事實に、少なからぬ研究者が戸惑いを覺えている。劉月華・潘文娛・故

韓一九八三は「*有些詞作結果補語…時、詞匯意義有所改變*」（結果補語になる…時、語彙の意味に變化を生じるものがある）と説明を加えた上で「見」に觸れる。⁵⁾ この記述から、劉氏は、視覺動詞以外と結合する「見」の用法は、それ本來の機能によるものでないと考えていることが知られる。

「見」が視覺以外の知覺動詞と結び付くのは、補語構造が構成された結果として「語彙の意味に變化を生じ」たためなのであろうか。もし「見」が對象を知覺動詞全般に擴大したのであるならば、なぜ視覺・聽覺・嗅覺に限られ、觸覺にまで及ばなかったのであろうか。Yuen Ren Chao (趙元任)一九六八は、結果補語構造「V見」が成立する條件として、話者の意志的な行爲でない點を指摘した後、觸覺を示す「摸見」という表現を想定しつつ、實際にはそれが存在しない理由について次のように述べる。⁶⁾ *since the act of feeling with one's hand is considered more active than the reception of the distant senses (手で觸れるという行爲は、向こうからやってくる感覺というより、むしろ主動的な動作だと考えられるからである)*。趙元任は、知覺動詞全般と結び付く特性が「V見」に備わっていると認定した上で、それが觸覺にまで擴張されないのは、觸覺を示す動詞に主動的・意志的動作と

しての要素が含まれるからであると考える。しかし、非意志的な「意圖しない行爲の結果として自然に觸れる」という動作があり得るわけだから、この説明は合理性を缺いていると言わねばならない。

このように、これまでいくつかの見解が示されてきたにもかかわらず、補語の「見」がなぜ視覚・聴覚・嗅覚にまで適用されるかについて、明確な答えが用意されていない。志村一九八四は、視覚や聴覚の動詞について「これらの感覚をあらゆる動詞は一般に詞性を轉換することが多いので、その過程を跡づける必要がある」と述べる。

小論は、補語構造「V見」の變遷過程を明らかにし、あわせて補語の「見」がなぜ視覚以外までに擴張されながらも觸覚には及ばなかったかについて、歴史語法研究の觀點から解答を得ることを試みる。

二 上古漢語における所謂「結果補語構造」

補語に關する語法史研究は數多い。そのうちの一つである余健萍一九五七は、複合動詞の内部構造を十分に吟味することなく分析を進め、結果補語構造は秦漢の時代に大いに發展したと考える。一方、王力一九五八は、漢代の用法について次の用例を挙げ、他動詞・自動詞の區別に基づき、「虜滅」は他動詞の等立的連用による並列構造であり、「射傷」は補語構造を構成すると認める。

二十五年、秦虜滅韓王安、置潁川郡。〔史記〕「燕召公世家」
 (二十五年に秦は韓王安を虜にして滅ぼし、潁川郡を置いた)

射傷郤克、流血至履。〔史記〕「齊太公世家」(矢が郤克を射て傷つけ、その血は「彼の」靴にまで流れた)

しかし梅祖麟一九九一は、上古漢語の「滅」や「傷」が共に他動性・使動性(…を〜させる)を強く備えていることを根據に、「V滅」

や「V傷」のいずれをも補語構造の用例と扱わない。梅氏によれば、これらは等立的連用による並列構造であるとされる。

複合動詞が結果補語構造を構成しているか否かについて、蔣紹愚一九九〇も同様の見解を示し、複合動詞内における第二成分としての動詞が使動用法で用いられないこと、及びそれが後置される賓語と動賓關係を構成しないことを、結果補語構造を認定する條件とする。結果補語は、複合動詞の第一成分によって示される動作をシテが行なった結果、複合動詞の第二成分によって表わされる状態がウケテに發生したことを示すものであるから、第二成分が使動用法として機能しているのであれば、その複合動詞が結果補語構造を持つと認めることはできない。

したがって、結果補語構造の歴史的變遷を考察する際、この觀點からの検討を缺いたまま、複合動詞の内部構造を論じることには不適當である。現代語では自動詞と目されるものでも、先秦時代においてしばしば他動性や使動性を強く備えていることが確認できるからには、結果補語構造の起源を古くまで遡ることは難しいと言わねばならない。しかし、やがて南北朝以後になると、結果補語構造を構成すると考えられるものが出現し始める。さらに、「得」「不」を挿入することで可能を示す可能補語句型も姿を表わすようになる。

以上の先行研究に據れば、先秦時代から六朝・唐代にかけての數百年間は、結果補語構造及びそれに關連する可能補語構造が發生・發展する重要な時期であることが知られる。そこで、先ず上古漢語から中古漢語にかけての「V見」の用法を觀察することにする。

三 上古漢語における「見」

上古漢語において、「見」を含む複合動詞の中で、大量の用例を認めることができるもの一つとして「望見」が存在する。また、數は少ないが、「窺見」も見出すことができる。

楊伯峻・何樂士一九九二は、『論語』の「窺見」や『史記』の「望見」を、「他動詞が結果補語として使用」されている例として扱っている。しかし前述の王力一九五八、梅祖麟一九九一及び蔣紹愚一九九九の見解に従うなら、「見」が他動詞（他動性または使動性を備えた動詞）である場合、これらの語は等立的連用によって成立しているものとして扱われなければならない。楊・何兩氏は、現代漢語の「V見」が結果補語構造であるという事實をそのまま上古漢語に持ち込み、上古漢語の同形のそれを現代漢語の結果補語と同價値のものに見なしている。

上古漢語における「望見」及び「窺見」の語構造を知るためには、第一成分（望、窺）が第二成分（見）とどのような關係を構成しているかを確認しなければならない。そこで「見」について、『説文』に據って見れば、

見、視也。〔段注〕析言之、有視而不見者、聽而不聞者。渾言之則視與見、聞與聽一也。『説文』八下「見」とは「視」のこと。〔段注〕細かく區別して言うると、見ても見えないことがあるし、聞いても聞こえないことがある。區別しないで言うると、「視」は「見」と、「聞」は「聽」と同じである。

段注で述べられている「視而不見」は「心不在焉、視而不見」（『禮記』「大學」）から引用したものであり、ここでは「視」と「見」が區別して用いられている。『説文解字部首訂』は、「視」と「見」の違い

結果補語構造「V見」の發生とその變遷

について次のように説明する。

用目及物曰視、物來遇目曰見。〔説文解字部首訂〕（目でもものに及ぶのを「視」と言い、ものが目の方へ来るのを「見」と言う）すなわち、「自分から意圖的にものを見る」のが「視」であり、「ものの方から自然に見える」のが「見」である。段注の所謂「析言」とは、こうした區別のある用法を指すと理解できる。

一方、「視」と「見」を區別しない用法も見い出される。

恣耳之所欲聽、恣目之所欲視……夫耳之所欲聞者音聲、而不得聽、謂之闕聽。目之所欲見者美色、而不得視、謂之闕明。〔列子〕「楊朱」（耳が聞きたがるものを自由に聞き、目が見たがるものを自由に見る……そもそも耳が聞きたがるものとは心地よい音であり、それを聞くことができなことを「耳を塞ぐ」と言う。

また目が見たがるものとは美しい色であり、それを見ることのできないことを「目を塞ぐ」と言う）

ここでは「視」と「見」が巧みに使い分けられつつも、「目之所欲視」と「目之所欲見」の兩句において、「自分から意圖的に見る」の意味を示すために「視」と「見」が區別なく用いられている。段注の所謂「渾言」とは、こうした用法を指すのであろう。

このように、「視而不見」（『禮記』「大學」）の「見」は「自然に見える」という意味を表わし、「目之所欲見」（『列子』「楊朱」）の「見」は「意圖的に見る」の義を示す。したがって、「見」には、非意志性動作を表わす機能と、意志性動作を示す機能の兩機能が存在し、場合によって、それが區別して用いられることもあるし、混同して用いられることもあることが知られる。そこで「見」の用法をさらに觀察すると、

夫子之牆也數仞，不得其門而入者，不見宗廟之美，百官之富。
 『論語』「子張」(先生の「人格の高さを示す」)垣根は數丈の高
 さですから、入り口から入らなければ靈廟の美しさや諸官の盛ん
 な様子は見えません)

この「見」は非意志性動作としての「自然に見える」ことを指す。
 しかし一方、意志性動作としての「意圖的に見る」ことを示すと理解
 できる例も存在する。

尹夫人自請武帝，願望見邢夫人，帝許之。即令他夫人飾，從御
 者數十人，爲邢夫人來前。尹夫人前見之，曰「此非邢夫人身也。」
 『史記』「外戚世家」(尹夫人は邢夫人の姿を遠くから見たいと
 言ったので、帝はその願いを許可した。そこで帝は別の夫人を着
 飾らせ、數十人の従者を従え邢夫人に成りすまさせて進ませた。
 尹夫人は進み出てそれを見て「これは邢夫人ではない」と言った)
 ここでは「見る」ことを意圖してその行爲を行なったことが文脈に
 より明らかであるから、この「見」は意志性動作を示すものと解する
 ことができる。このように、同じく『見』+O(賓語)句型であっ
 ても、「見」には「自然に見える」と「意圖的に見る」の兩用法があ
 ると觀察できる。

四 上古漢語における「V見」の用法

「見」に二通りの用法が存在するという事實は、「望見」という複合
 動詞が構成された場合にも認めることができる。

已而相如出，望見廉頗，相如引車避匿。『史記』「廉頗藺相如列
 傳」(相如が外出して、「路上で」廉頗が遠くに見えると、相如
 は車を傍らによせて避け隠れた)

この「望見」は「離れたところから」自然に見える」という意味
 で用いられているが、一方で、「意圖的に見る」ことを指すと理解す
 べき「望見」も存在する。

尹夫人自請武帝，願望見邢夫人，帝許之。於是帝乃詔使邢夫
 人衣故衣，獨身來前。尹夫人望見之，曰。『史記』「外戚世家」
 (尹夫人は邢夫人の姿を遠くから見たいと言ったので、帝はその
 願いを許可した。…そこで帝は邢夫人に古い服を着せて一人で前
 へ進ませると、尹夫人は「彼女を」遠くから見つめた)

これは前掲同篇例文の同部分であり、行爲者が「自ら武帝に請う
 て「望見」という行爲を行なったわけであるから、この「望見」は、
 「離れたところから」意圖的に見る」ことを指すと讀める。

同様に、「窺見」においても二種類の用法を確認できる。例えば、
 警諸宮牆也，賜之牆也及肩，窺見室家之好。『論語』「子張」
 (これを建物の垣根にたとえると、私の「人格の高さを示す」垣
 根は肩の高さしかないのです、家の中の良さが覗いて見えます)

是以群小窺見間隙，緣飾文字，巧言醜詆，流言飛文，譁於民
 間。『漢書』「楚元王」(そこで群小が隙間を窺い、文字を飾り、
 巧言悪口を述べ、流言飛語を言って民間に喧しく騒いでいます)
 右の『論語』「子張」から引いた例文は、先に掲げた同篇の例文と
 同じ文脈で使用されているものであり、「覗いて」自然に見える」の
 意味を示す。一方、『漢書』「楚元王」の例は「覗いて」意圖的に見
 る」の用例である。

以上から、上古漢語における複合動詞「V見」には、意志性動詞と
 しての意味(意圖的に見る)と非意志性動詞としての意味(自然に見
 える)の兩義の存在したことが知られる。

太田一九六〇は「V見」の「見」について、上古漢語の用例を一律に、「恣意的な動詞を非恣意化している一種の接尾辭」の起源と見なす¹³。しかし上古漢語において、「見」に意志性動作と非意志性動作を示す兩用法が存在したことが確認できるからには、上古漢語の「V見」には、中古漢語以降のそれとは異質のものが含まれていると見るべきであろう。

五 上古漢語における「V見」の語構造

補語構造の定義について、梅祖麟一九九一は以下の點を擧げる。¹⁴

① 『動詞・補語構造』とは二つの成分により構成された複合動詞であり、複合動詞の第一成分が他動詞であり、第二成分が自動詞または形容詞であること。

② 「シテ＋『動詞・補語構造』＋ウケテ」の構造を持つこと。

③ 他動詞によって示される動作を用いて、シテがウケテを、自動詞または形容詞によって示される状態にすること。

④ (上古漢語については無關係なので省略)

これらの條件を承認した上で「V見」について検討するのは興味深い。「V見」の文法機能に二重性を見出すことができるからである。すなわち、「見」が意志性動作(意圖的に見る)を表わす機能を持たずなれば、「見」が他動性・使動性を備えるものを言い、「自動詞」とはその性質に缺けるものを指すことは明らかだから、この時、「V見」の内部構造は「他動詞＋他動詞」となり、右の第一條件に一致しない。したがって『史記』「外戚世家」の「望見」(遠くから意圖的に見る)や『漢書』「楚元王」の「窺見」(覗いて意圖的に見

る)は等立的連用によって成立しているものと見なさなければならぬ。つまり、上古漢語の他の多くの動詞と同様に、これらの「V見」は補語構造を構成していない。

ところが、「見」は非意志性動作(自然に見える)をも示すことができ、讀書體驗に基づくこと、むしろこの用法の方が多い。この時、シテの主體的な意識によって「見」という動作が支えられているわけではなく、そのため對象に對する他動性・使動性は低い。結果、「見」は意味に基づく機能の點について見れば、梅氏の所謂「自動詞」であるかのようにふるまう。

志村一九八四は慧眼にも、「V壞」「V盡」に對して「壞V」「盡V」が存在する事實を見出し、これを根據に、六朝初期における大部分の複音節動詞はなお等立性を保持していたと考へる。そこで氏に倣い、「V見」の内部要素の位置交代の例として、「見望」「見窺」「見看」「見觀」などの語の存在の有無を調査すると、その用例を容易に見い出せない。この事實は、「見」が他の構成要素と複合動詞を作る際の、他動性及び使動性の低さを物語る。これは「見」が、複合動詞内において、「自動詞」に類似した特性を備えていることを暗示する。

非意志性動作を表わす「見」が、意味や用法の點でかくも「自動詞」に共通する機能を持つ以上、上古漢語における「V見」は、梅祖麟一九九一が主張する右の三條件をほぼ満たすと言える。その結果、『史記』「廉頗藺相如列傳」の「望見」(遠くから自然に見える)や『論語』「子張」の「窺見」(覗いて自然に見える)は補語構造に限りなく接近することとなる。

以上から、上古漢語の「見」及び「V見」について、次の四點を指摘できる。

①「見」は「見+〇」という形態で賓語を伴う点について見れば、他動性・使動性を備えるかのようである。しかし、「見」は意志性動作「意圖的に見る」と非意志性動作「自然に見える」との兩義を備えているので、前者の用法で用いられた際には他動性を發揮するが、後者の用法で使われた時には、著しく他動性に缺ける。

②そのため、複合動詞「V見」が構成された時、内部構造について二重の文法性が示される。すなわち、「見」が意志性動詞として用いられた際には、等立的連用による並列構造に接近し、「見」が非意志性動詞として使われた時には補語構造に接近する。

③その結果、非意志性動詞として使われた際、「見」は上古漢語期において、擬似的な補語構造を成立させることが可能となる。

④等立的連用による並列構造「V見」と擬似的な補語構造「V見」は形態的には同一である。そのため、見かけ上、舊用法（並列構造）を保持しつつ新用法（補語構造）へ移行することが可能となり、言語の連続性が保障されやすくなる。

「見」はこうした特性を利用して、やがて興起する結果補語構造の先驅的役割を果たすこととなったと考えられる。

六 「看見」の成立

魏晉時代になると「V見」は、多様な姿を示す方向へと發展する。志村一九八四は上古漢語から中古漢語にかけて、補語構造の發展過程を丁寧²⁰に分析する。その指摘によると、中古漢語期の用例として「望見」「窺見」の他に「會見」「瞥見」も認められる。同様に太田一九五八は、次の例を示し、「看見」が中古漢語期にその姿を現わすことを指摘する。

相師看見 懷喜而言。〔賢愚經〕十二（人相見はこれを見ると喜んでいった）

中古漢語において、「V見」は、その数を増加させただけではなく、可能補語句型をも構成しつつ、結合する動詞の對象範圍を擴大させる。こうして、これまで等立的連用による並列構造としての疑いのあった「V見」は、明確に補語構造を成立させるに至る。楊建國一九五九は、「樓高望不見」（西洲曲）、「窺不見底」（水經注）、「汀上白沙看不見」（張若虛「春江花月夜」）などを指摘する。

さらに例を求めれば、

吾求不見 連累爲鞭杖。〔搜神記〕五（私は「あなたを」探して見つけれなかったので、罪が及んで鞭や杖で打たれた）

余時漸漸去遠 聲沈影滅 顧瞻不見 惻愴而去。〔遊仙窟〕（私はそこでしだいに遠ざかって行くと、聲はかすかになり、姿も消えて、振り返って見ても見ることができず、悲しい気持ちで立ち去った）

家丁三人中兩人分路覓去 終日覓不見。〔入唐求法巡禮行記〕四（會昌五年五月十六日）（家の役夫三人のうち二人が手分けして「脱走した僧を」探したが、一日中見つけることができなかった）

右例のうち、「求不見」は「視覚動詞+見」ではない。しかしこの語は「目で探し求めても見えない」という意を持つから、「求不見」の「見」はなお「視覚として見える」という本義を残したままである。そのため、結び付く動詞の範圍が擴大されたとはいえず、これらの用法における「見」は、知覚一般が認識されたことを示すわけではないことがわかる。つまり、補語「見」は、「見える」という本来の意味をなお保存したままである。

七 聽覺の「見」

さて、既に示したように「見」の本義として「見える」の意味の
ことは言うまでもない。しかし實はこの語にはもう一つの意味があ
る。例えば、張相一九五五が擧げる例を使用すれば、

見説、白楊堪作柱，爭教紅粉不成灰。(白居易「燕子樓」三)(愛
する男の墓に植えた)白楊は柱の太さになっていそうだが、女
の我が身はなげ灰とならずに「生きながらえて」いるのであろう
か)

よく知られているように、この「見説」は「キクナラク」と訓讀さ
れ、「聞説」と同じ意味として解されなければならない。こうした例
は唐詩にいくつか存在し、「君不見青海頭，古來白骨無人收」(杜甫
「兵車行」)の「君不見」に含まれる「見」も、「聞」に通じる用法の
一つとされることがある。

従來、「聞(聞こえる)に通じる「見」について觸れられる時、「見
説」や「君不見」ばかりが指摘される傾向にあり、そのため特殊な慣
用句においてのみ「見」が「聞こえる」の意味を持つかに理解されが
ちである。しかし、「見」は單獨で使用されても「聞こえる」の意味
を持ち得る。張相一九五五で既に指摘されている例(「香爐峰下新卜
山居重題」)を含めて示すと、

至於設會，一人唱，則客前後唱則罷會。唯有此法，不見音樂。
『洛陽伽藍記』五「城北」「聞義里」(宴會を設けると、一人が歌
い、客が前後して歌ってから宴會が止む。ただこんな具合で、音
樂は聞こえない)

心虛不可測，眼細強關情。迴身已入抱，不見有嬌聲。『遊仙

結果補語構造「V見」の發生とその變遷

窟」(女の)心はうつろで知ることができず、切れ長の目がな
かなか魅力的。身を翻して抱かれているのに、甘えた聲が聞こえ
ない)

不見念佛聲，滿街聞哭響。(王梵志「不見念佛聲」)(念佛の聲が
聞こえず、街中に「死者を悼む」泣き聲が聞こえる)

從茲耳界應清淨，免見啾啾毀譽聲。(白居易「香爐峰下新卜山居
重題」一)(これからは、耳に觸れる話題が清らになり、うる
さい毀譽褒貶の言葉を聞かずにすむであろう)

明代白話作品においても、

宋江見這話，心裏越慌。『水滸傳』二二(宋江はこの話を耳
にすると、いよいよ焦ってしまった)

これらの例では、「見」が比喩または象徴的な意味で音聲を賓語と
して従えているのではない。ここでは「見」が「聞こえる」の意味で
用いられていることは明らかである。これは、單なる視覺から聽覺へ
の擴張用法なのか、あるいはそれ以外の原因に基づいて發生した現象
なのか明らかでない。

清・李調元の『方言彙』は「按、唐人多以聞説爲見説、當時方言如
此」(『方言彙』上)(思うに、唐の時代の人はしばしば「聞説」を「見
説」と言う。これは當時の方言である)と述べる。また太田一九六〇
も、「見」が視覺から聽覺へと轉ずるのは唐代からであるとす。し
かし、右に示したように、唐以前にこうした「見」の用例を見い出せ
ることから、單なる「唐人の方言」でないと推測すべきである。「聞
こえる」を示す「見」は、特定の一時代の一地方のものでないと考え
てよい。

中古漢語において、「見」に「聞こえる」という意味を示す機能が

存在し、且つ「見」を補語として使用可能な環境が成立している以上、聽覺を示す「見」は必然的に別の聽覺動詞と結びついて補語構造を構成するはずである。そこで「聞こえる」の意を持つ「見」が、聽覺を示す常用動詞「聽」と結び付けば、よく知られた「聽見」が成立することになる。太田一九六〇は「見」が視覺の他に聽覺をも表わす事實に注目した上で、「聽見」という語ができる条件は全くとのつた」と考へる。

八 「聽見」の成立

聽覺の「見」の用法の出現にやや遅れて、「聽見」の初期の用例を見出すことができるようになる。太田一九五八は次の例を擧げる。

我於彼聽見大師勸道俗、但持金剛經一卷、即得見性、直了成佛。〔六祖壇經〕（わたしはそこで大師が道俗を化するにただ金剛經一卷を持すればすなわち見性して直に成佛を得ると説かれてゐるのをきいた）

「聽見」はこの後、近世漢語へと受け繼がれ、現代漢語に傳えられる。你休要犯王條成罪愆、則索辨人倫依正典。不聽見九烈三貞女、三從四德賢。〔元刊雜劇三十種〕「張千替殺妻」(あなたは法を犯して罪作りなことをするのはよして、人の道をわきま法に従うより他ありません。貞女の鏡、妻の道德ということ聞いたことがないのですか)

我小人兩個鼻孔一夜不曾閉、併不聽見女鬼訴甚麼冤狀、也不會聽見相公呼喚。〔元曲選〕「寶娥冤」(四)(私は兩方の鼻の穴を一晚中閉じずにいたのですが、女の幽霊が無實の罪などを訴えに來たのは聞こえませんでしたし、旦那様がお呼びになったのも聞

こえませんでした)

「聽見」の内部構造を検討すれば、前章で示した聽覺の「見」の機能に基づき、この「聽見」は、『聞く』+『聞こえる』の構造を持つと認めることができる。中古漢語以降に發展しつつあった補語構造が、「望見」「看見」からの類推のもとで、聽覺を示す「見」に頼りながら「聽見」を生み出したものである。

であるからには、「聽見」は「見」が本来持つもう一つの語義(聞こえる)を保持したまま、補語構造を成立させていると言える。補語構造を構成した結果として、「見」に語彙的意味の變化が生じたわけではない。「聽見」は、「V見」が多用される環境において、中古漢語が持つ「見」の意味の二重性(見える・聞こえる)により、聽覺の「見」(聞こえる)が「聽」を引き寄せた結果、成立したものである。

九 聽覺の「聞」と嗅覺の「聞」

言うまでもなく、聽覺を表わす動詞は「聽」のみではない。文言では「聞」が常用され、これが近世漢語の文體においても引き続き用いられる。例えば、

款款地進兩脚、掉下個折針也聞聲。〔劉知遠諸宮調〕(二)(そろりと足を踏み入れれば、針を落としても音が聞こえる[ほど静かだ])

ところが一方、周知のように、「聞」は「聞こえる」の意を持ちながら、「匂いを感じる」の意をも示す。嗅覺の「聞」は新しい時代によくやく出現した機能と考えられがちであるが、實はその用法の起源は相當に古く、上古漢語に既に存在する。

共王駕而自往、入其幄中、聞酒臭而還。〔韓非子〕「十過」(共

王は車で自ら「將軍の」陣中に入ったところ、酒の匂いがしたの
で自分の陣に歸った)

人之將死、惡聞酒肉之味。邦之將亡、惡聞忠臣之氣。〔越絶書〕
「德序外傳記」(人が死ぬ間際には酒肉の匂いを鼻にするのを嫌
い、國が滅ぶ間際には忠臣の匂いを鼻にするのを嫌う)

發棺時臭穢於天、洛陽丞臨棺、聞臭而死。〔論衡〕「死爲」(棺
を開けると惡臭は天を突き、洛陽の役人が棺に近づいて匂いを嗅
いだため死んでしまった)

こうした用法は、一定程度に白話性を保持した六朝以降の作品にも
受け継がれる。太田一九五〇は「威聞香氣芳」(張華『博物誌』)や「縱
死猶聞俠骨香」(王維「少年行」)などを指摘する。類例は他にも存
在する。

蛇便出、頭大如函、目如二尺鏡、聞香氣、先啗食之。〔搜神
記〕一九(そこで蛇が出てくると、「その蛇は」頭が圓形の倉の
ように大きく、目が二尺の圓鏡ほどもあり、團子の香りを嗅ぎつ
けると先ずそれを食べた)

乃知其終。弟子侍側、普聞馨烟。〔冥祥記〕「宋仇那跋摩」(そ
こでようやく「その僧が」世を去ったことを知った。弟子達はそ
ばに仕えていて、皆すばらしい香りを感じた)

醜多亡日、像自然金色、光照四鄰、一里之内、咸聞香氣。〔洛
陽伽藍記〕四「城西」「卓財里」(醜多が亡くなった日、佛像は自
ずと金色になり、四隣を照らし、一里四方では悉くよい香りがし
た)

これらは、いずれも「匂いを感じる」の意を示す「聞」である。聽
覺を表わすはずの「聞」がなぜ嗅覺をも示すかについて興味を持たれ

るが、これには『説文』の記述が参考になる。

『説文』では「馨、香之遠聞也」(『説文』七上)「馨」とは香りが
遠くまで届くことと説明される。目に見えないものが遠くまで傳わ
るといふ點に、音聲との共通點を見い出すことができる。また、後世
に傳えられる名聲を「馨」と表現することから、「香りが傳わる」と
「音聲が傳わる」とが意義の上で連想を呼び易い事實を讀み取ること
もできよう。

「聞」が持つこうした二義性について、洪成玉・張桂珍一九八七は、
香りが空間的に廣がって人間によって知覺されるため、「音が聞こえ
る」の基本義が引伸されて、「聞」が「匂いを感じる」の意味をも持
つようになったと考える。一方、張永言一九六二は、本來は異なる二
語が同形の語に變化した結果、「聞」が聽覺と嗅覺の兩方に使用され
るに至った可能性を指摘する。

これらの見解の正當性を評價する材料に乏しいものの、古語におけ
る「聞」が古くから聽覺と嗅覺とを示す事實は、ここで確認されなく
てはならない。上古漢語と同様、中古漢語以降においても、「聞」は
「音が聞こえる」と「匂いを感じる」の二義を持っていた。そのため、
一文において、「聞」が聽覺と嗅覺の兩方に使用される例も存在する。

忽有物如蛇、突入其腦中。蛇來、先聞臭氣、便於鼻中入、盤其
頭中、覺嗅味僅聞其腦間食聲啞啞。〔搜神記〕一七(いきなり蛇
のようなものが頭の中に入って來た。蛇が「頭に入って」來る
時、先ず「人が」臭い匂いを感じると鼻から「蛇が」入り、頭の
中でとぐるを巻いた。ガンガンという音が響くような氣がする
が、「實は」わずかに頭の中でものを食べる音がゴソゴソ聞こえ
るだけだった)

言うまでもなく、前者の「聞」は嗅覺を示し、後者の「聞」は聽覺を表わす。兩者のどちらの意味で「聞」が使用されるかは、ひとえに文脈に頼って決定される。同一話柄における兩用方の混在は、兩者が實際の運用の面で混亂しがちな條件の下にあったことを示している。こうした環境が、やがて、嗅覺の「聞」と聽覺の「聞」とを交錯させる下地になったと考えられる。

十 「聞見」の變質と新用法の發生

さて、補語構造を持つわけではないが、意味と形態において、「聽見」に酷似した語が存在する。「聞見」がそれである。この語は字面通り「見聞きする」(または、見聞きすること)の意を持ち、古くから使われる。例えば、

是非容貌之患也、聞見之不衆、論議之卑爾。〔荀子〕「非相」(これは容貌が悪かったせいではなく、見聞きした知識が乏しく議論が卑俗だったせいである)

今道雖不可得、聞見、聖人執其見功以處見其形。〔韓非子〕「解老」(今、道というものを見たり聞いたりすることはできないものの、聖人は道の功を把握し、道の形を推し量る)

人不聞見、天獨知之、故受戮殃。〔論衡〕「禍虛」(人は見たり聞いたりしないが、天だけはそのことを知っているので、「彼らは」殺されるといふ禍を受ける)

中古漢語資料においても、

凡所聞見、若此非一、得知妖物之爲。〔搜神記〕十七(見聞きしたことがこのように「事實に一致するの」が「一つだけではないので、妖怪のしわざだということがわかった)

有聞見不？〔冥祥記〕「宋慧遠」(見たり聞いたりしたものがあるか)

ところが遅くとも近世漢語期までに、この語は新しい用法を身に着ける。すなわち、

崇侯虎正在夢中聞見殺聲、披袍而起、上馬提刀、冲出帳來。

〔封神演義〕二(崇侯虎はちょうど夢の中で敵の攻めてくる音を聞いたので、服をおって立ち上がると、馬に乗って刀を手に取り、陣屋をとび出した)

若說那「忤逆」二字、這耳內是絕不聞見的。〔醒世姻緣傳〕二(もし「不孝」という二文字の話題を言うのなら、この耳には決して聞こえない)

左良玉同袁繼威、黃澍等併馬而來、至酒樓下、聞見樓上歌聲嘹亮、便一齊勒住馬、問說。(小説『桃花扇』一四)(左良玉、袁繼威、黃澍等の三人は馬を並べて酒樓のもとまで来たところ、澄み渡る聲で歌を歌っているのが聞こえたので、ともに馬を止めて尋ねた)

ここで使用されている「聞見」という行為の對象はすべて音聲を示すものに限られる。したがって、これらはいずれも「聞こえる」の意味で使用されていると認むべきである。そのため、中古漢語以前にしばしば使用された「聞見」(見聞きする)とは異なるものと見なければならぬ。

従來の「聞見」(見聞きする)は明らかに等立的連用による並列構造を持つと考えられるが、新用法では「聞見」が本來含んでいるはずの「見る」の意が脱落しており、聽覺を示す義のみが保存されている。つまり「聞見」内部の「見」が實義を失っている。これはもはや

並列構造ではあり得ない。

實は、「聞見」のこうした用法が現われ始めるのとはほぼ同じ頃、「V見」型補語構造に變質の生じつつあった傾向が觀察できる。それは、「V見」において第一成分として選擇される動詞の範圍が、これまでも増して擴大されるという事實である。例えば、古語であるにもかかわらず、なお白話に残留していた文言系語彙「夢見」が明確に補語構造化し、「夢不見」(『濟顛語錄』)という形態が出現する。「夢不見」の發生は、わずかな共通點さえ存在すれば、そこに類推が機能し、「V見」の第一成分として多様な動詞が呼び込まれることが可能であるとを示している。

明代までにこうした環境が成立していたからには、「聞見」が「見聞きする」から「聞こえる」の意へと變化したのは、聽覺という共通項を媒介として、「聽見」(聞こえる)の語構造が従来の「聞見」(見聞きする)に適用された結果であると考えられる。

こうして新生の「聞見」(聞こえる)は「聽見」(聞こえる)と同構造の同義語として、新たに「V見」型補語構造の仲間に加わった。「V見」型補語構造は、その隆盛を背景に、類義で類似の形態を備えた複合動詞に對して、強力な類推作用を發揮していると觀察できる。

ところが「聞見」の變質はこれだけにとどまらない。すなわち嗅覺の「聞見」(匂いを感じる)の出現である。

但刮西風有一股穢氣，就是洵東園也不似這般惡臭。如今正值春深，東南風大作，所以還不聞見也。(『西遊記』六七)(西風が吹くと臭い匂いがして、たとえ便所の汲み取りでさえもあんなに臭くない。今はちょうど春の盛りで、東南の風が強いので、なんとか匂いは感じない)

結果補語構造「V見」の發生とその變遷

口氣，體氣，脚氣。鄒小姐聞見的是第二種，俗語叫做狐腥氣。

『無聲戲』一(口臭，體臭，足の匂いのうち、鄒さんが感じたのは二番目で、俗に言う「わきが」というやつだった)

睡の時節，覺得一陣異香，與那日初會時聞見的一樣。(『肉蒲團』一二)(寝ようとすると、かぐわしい香りを感じ、それは初めて會った時に感じたのと同じだった)

太田一九六〇は嗅覺の「聞見」に對して、「看見」や「聽見」との構造上の整合性を求めるあまり、「聞」の機能が非意志性(自然に匂いを感じる)から意志性(意圖的に匂いを嗅ぐ)へと變質した結果、右掲『西遊記』の用法が發生したと説く。しかし上古漢語以來、嗅覺の「聞」(匂いを感じる)が存在し、且つ「見聞きする」という意味の動詞「聞見」が使用され、さらに近世漢語期までに聽覺の「聞見」(聞こえる)までもが成立する環境が整っていた以上、嗅覺の「聞見」の成立要件として、「聞」の意志性への變質を求める必要はない。氏は知覺動詞全般に關して意志性動詞と非意志性動詞とを峻別することに拘るが、「見」において見た如く、古くから段注の所謂「渾言」(第三章で引用した『說文』段注)の用法も存在するのである。

したがって聽覺の「聞見」(聞こえる)が意味上の類推により、聽覺の「聽見」(聞こえる)から生み出されたように、嗅覺の「聞見」(匂いを感じる)も、形態と意味に基づき類推により、聽覺の「聞見」(聞こえる)や「聽見」(聞こえる)を契機として發生したと推測することは合理的である。聽覺の「聞見」(聞こえる)は「聽見」の同義異形として成立したにもかかわらず、「聞」の二義性(聞こえる・匂いを感じる)に引きずられ、「匂いを感じる」の意味をも持つことになったと考えられる。これは、上古漢語以來、「聞」が一貫して二義

性を備えていた事實に呼應するものであり、「聞」に注目した視點から見れば、むしろ自然なことであるとさえ認むべきである。

十一 聽覺の「聞見」の衰退

「聞見」が「匂いを感じる」の意味を示すまでに擴大された結果、近世漢語の白話文體において、「聞見」は聽覺を表す用法と嗅覺を示す用法とが同形で同時に存在することとなった。しかし周知のように、「聞こえる」の意を持つ「聞」は文言内で保存され、口語では「匂いを感じる」の意を持つ「聞」が繼承される方向へと分化した。その結果、「聞こえる」を表わす「聞見」は近世漢語後期にはしだいに力を失うこととなる。清代中期の『儒林外史』では、使用される四例の「聞見」のうち、すべてが「匂いを感じる」を示す用法である。

直到天晚，革囊臭了出來，家裏太太聞見，不放心，打發人出來請兩位老爺去看。『儒林外史』一三（夜になつて革袋が惡臭を發するようになったので、家の奥さんは匂いを感じ、心配になり、人をやつて二人の旦那に見てもらつた）

他病到第五天上，忽然鼻子裏聞見一陣綠豆香。『儒林外史』二三（彼は下痢を續けて五日目に、突然、綠豆の香りを鼻に感じた）
 小弟性情，是和婦人隔着三間屋就聞見他的臭氣。『儒林外史』三〇（私の性分として、女性とは部屋を三つ隔てていてもその匂いを感じるのです）

陳木南下樓來進了房裏，聞見噴鼻香。『儒林外史』五三（陳木南は階上から下りて來て部屋に入ると、鼻をつく香りを感じた）
 こうして、聽覺を示す「聞見」（聞こえる）が淘汰され、嗅覺を示す「聞見」（匂いを感じる）が現代漢語に繼承されることとなる。

十二 まとめ

「V見」型補語構造の成立について、視覺、聽覺、嗅覺に分けてそれぞれの成立過程をまとめると、次のようになる。

すなわち、上古漢語の「見」が、意志性動作（意圖的に見る）と非意志性動作（自然に見える）を示すことができたため、「V見」は等立的運用による並列構造と、擬似的な結果補語構造とを成立させた。「見」のこの特性は、補語構造が一般的でなかつた上古漢語の環境において、見かけは並列構造を持ちながら實は補語構造に接近する便法として、機能した。

その後、中古漢語期における補語構造隆盛の流れの中で、「V見」は視覺動詞と廣く結びつき、「看見」を生み出した。言うまでもなく、これは「見る+見える」という語構造を持つものである。

この時、少なくとも一部の方言において、「見」は「見える」の他に「聞こえる」の意味でも使用可能であつたため、聽覺を示す「見」が聽覺を表わす他の動詞と結びつき、補語構造を作り上げた。こうして成立したのが「聽見」である。したがつて「聽見」の内部構造は「聞く+聞こえる」であり、この「見」は「見える」の意味を持たないのはもちろんのこと、知覺全般を表わす機能をも擔っていない。

一方、聽覺を示す常用動詞として「聞」が存在したので、「聽」と同じく「聞」も補語構造を作り上げようとした。この時、偶然にも、「聞見」（見聞きする）という語が古くから使用されていた。そのため、「聽見」が既に發生した環境の下で、意味と形態の類似性を媒介としつつ、聽覺の「聞見」（聞こえる）が生み出された。したがつて、新生の「聞見」（聞こえる）の語構造について見れば、ここでも聽覺

の「見」(聞こえる)が補語として機能していると言うことができる。

ところが「聞」は上古漢語以來近世漢語に至るまで、一貫して「聞こえる」と「匂いを感じる」の二義を持っていたことにより、「聞見」までもが、二義性を備えるに至る。嗅覺を示す「聞見」(匂いを感じる)がここに誕生するのである。しかし、嗅覺を示す「聞見」(匂いを感じる)は、聽覺を表わす「聞見」(聞こえる)との同形による混亂に乗じて發生したものであるから、この語構造に對して合理的な分析を求めることは無意味である。しいて言えば、「嗅覺の『聞』+聽覺を示す『聞見』の『見』の借用」である。

やがて、近世漢語後期において、聽覺の「聞」(聞こえる)の用法がしだいに失われるにつれ、二義性を備える「聞見」(聞こえる・匂いを感じる)は嗅覺の「聞見」(匂いを感じる)の一義に收斂される方向へと向かう。

こうした變遷の結果、現代漢語において、視覺を示す「看見」、聽覺を表わす「聽見」、嗅覺を示す「聞見」が整うに至る。視覺・聽覺・嗅覺という知覺を代表する三つの「見」が揃い、且つ、「見」の「聞こえる」という意味が失われて久しい現代漢語の環境にあっては、「見」の機能を分析・歸納しようとするれば、二つの解釋しか許されない。すなわち「知覺の認識を示す」という説明か、あるいは「見」を「現」に通じるものと見なし、「感覺の出現を表わす」と定義する見方である。

この「見」は視覺・聽覺・嗅覺のいずれにも用いられるという點において、知覺または感覺という共通性を備えるものであるが、その由来を辿れば、ひとえに中古漢語の「見」が「見える」と「聞こえる」の二義を備えていたこと、及び上古漢語・近世漢語の「聞」が「聞こ

える」と「匂いを感じる」の二義を擔っていたことによる。

現代漢語の補語「見」が以上の過程を経て成立したからには、補語としての「見」が視覺・聽覺・嗅覺の三種にのみ適用されるのは當然のことと言わねばならない。「見」本来の姿を探れば、少なくとも「看見」と「聽見」に關しては、「見」は相變わらず古くに存在する語義から外れていない。したがって、「結果補語になる…時、語彙の意味に變化を生じるものがある」という説明が、「聽見」を對象に含むものであるなら、その理解は正しくない。

「語彙の意味に變化を生じ」たと見ることができるのは、嗅覺の「聞見」(匂いを感じる)の「見」のみであるが、それとて偶然に偶然が重なった結果としての類推の産物である。「見」が知覺一般を示す機能を持つたようであっても、視・聽・嗅の三覺に限られ、その對象を觸覺にまで擴張できないのは、「見」の素性がそのまま現われているからに他ならない。そのため、觸覺について「『摸見』が成立し得ないのは、それが…」主動的な動作だと考えられるからである」という見解も、補語「見」の歴史に注意を向けなかったための勘違いということになる。

(小論は平成十一、十二年度科學研究費補助金による研究「基盤研究(C)」「複合動詞における内部構造の變遷に關する歴史的研究」の研究成果の一部である)

注

(1) 呂叔湘、一九八〇『現代漢語八百詞』商務印書館、二六二頁

(2) 小學館、一九九二『中日辭典』六七〇頁

- (3) 三省堂、一九九八『イリリーコンサイス中日辭典』二七〇頁
- (4) 劉月華・潘文娛・故韓、一九八三『實用現代漢語語法』外語教育與研究出版社、三三三頁
- (5) Yuen Ren Chao, 1968 A GRAMMAR OF SPOKEN CHINESE, University of California Press 四四八頁
- (6) 志村良治、一九八四「中世中國語の語法と語彙」『中國中世語法史研究』三冬社、五九頁
- (7) 余健萍、一九五七「使成式的起源和發展」『語法論集』二、中華書局、一一八頁
- (8) 王力、一九五八『漢語史稿』(修訂本) 科學出版社、中冊、四〇四頁
- (9) 梅祖麟、一九九一「從漢代的「動、殺」、「動、死」來看動補結構的發展」『語言學論叢』一六、一二三頁
- (10) 蔣紹愚、一九九九「漢語動結式產生的時代」『國學研究』六、三三〇頁
- (11) 李佐賢、一九八三「先秦漢語的自動詞及其使動用法」『語言學論叢』十「は現代漢語において自動詞と認められるものでも、かつては少なからぬ例が使動性を強く備えていた事實を明らかにしている。
- (12) 王力、一九五八、前掲書四〇五頁、また梅祖麟、一九九一、前掲書、一一九頁、さらに蔣紹愚、一九九九、前掲書、三四六頁
- (13) 楊建國、一九五九「補語式發展試探」『語法論集』三、四三頁
- (14) 楊伯峻・何樂士、一九九二「古漢語語法及其發展」語文出版社、六二二頁及び六二四頁
- (15) 太田辰夫、一九六〇「中國語動詞接尾辭「見」について」『神戸外大論叢』十一・三・四、一三六頁
- (16) 梅祖麟一九九一、前掲書、一一〇頁
- (17) 志村良治、一九八四「使成複合動詞の成立過程」『中國中世語法史研究』三冬社、二四八頁
- (18) 形態上「見V」型に屬する例として、「見觀」「見睹」「見覷」の存在

を確認できるが、このうち「見觀」(『莊子』「列御寇」「天下」)については復数のテキスト間で異同があり、その上これを「觀見」と同義の用法と認めることはできない。また「見睹」「見覷」はそれぞれ宋代・明代の用例であり、且つ等立的運用による並列構造を持つものではない。

- (19) 志村良治、一九八四「使成複合動詞の成立過程」『中國中世語法史研究』三冬社、二二六頁
- (20) 太田辰夫、一九五八『中國語歴史文法』江南書院、一八三頁
- (21) 楊建國、一九五九、前掲書、四三頁
- (22) 張相、一九五五『詩詞曲語辭匯釋』中華書局、五六二頁
- (23) 例文の「不見念佛聲」について、『王梵志詩校註』(張錫厚、一九八三、中華書局、一四八頁)は「原作『見』、據文義改」として「不見」を「不聞」に改めるが、一方『王梵志詩校註』(項楚、一九九一、上海古籍出版社、五八三頁)は原文のままが正しいとする。ここで「文義に據り」恣意的に改める必要はないので、原文通り「不見」とする。
- (24) 太田辰夫、一九六〇、前掲書、一三九頁
- (25) 太田辰夫、一九六〇、前掲書、一四〇頁
- (26) 太田辰夫、一九五八、前掲書、一八四頁。なお、例文の「持金剛經一卷」について、太田氏は「持」を「特」として引用する。敦煌本(S.26)は「特」となっているが、今、興聖寺本及び金山天寧寺本に基づき、「持」に改めた。
- (27) 例文の「不聽見九烈三貞女」について、古本戲曲叢刊所收『元刊雜劇三十種』影印本は、「三貞女」を「三眞女」に作る。『元刊雜劇三十種新校』(寧希元、一九八八、蘭州大學出版社、二一五頁)に従った。
- (28) 『元曲選』所收「寶娥冤」に據った。脈望館鈔校本『古今雜劇』所收「寶娥冤」にはこの部分なし。
- (29) 例文の「掉下個折針也聞聲」について、文物出版社、一九五八『劉知遠諸宮調』影印本は「掉」を「調」に作る。「校注劉知遠諸宮調」(内

田道夫、一九六三『東北大學文學部研究年報』十四、二六四頁)に従った。

(30) 太田辰夫、一九五〇「近代語における非恣意的動詞の形成について」『中國語雜誌』五一六、四七頁)は、嗅覺の「聞」の初期の用法として六朝の用例を指摘するが、同氏一九五八(前掲書、一八四頁)では漢代にまで遡っている。さらに、孟倫、一九六〇「聞」的轉義用法時代還要早」『中國語文』一九六〇(一五)は先秦時代にこの用法が存在したことを指摘する。

(31) 太田辰夫、一九五〇、前掲書、四七頁

(32) 洪成玉・張桂珍、一九八七『古漢語同義詞辨析』浙江教育出版社、一六二頁

(33) 張永言、一九六二「再談『聞』的詞義問題」『中國語文』一九六二—五

(34) 本文の「處見其形」について別の解釋があり得るが、今の場合、問題とならない。

(35) 小説『桃花扇』は乾隆初年刻本、竹窓齋評、翰香樓梓、六卷十六回。人民文學出版社、一九八四『古本平話小説集』所收のものに據った。

(36) 「夢見」は本來は補語構造を持つ語でない。古語が白話文體中で使用される過程で補語構造に變質したものである。詳しくは拙論二〇〇一『「夢見」の「見」は何を「見る」』(『筑波大學東西言語文化の類型論』特別プロジェクト研究成果報告書)IVで述べられている。

(37) 太田辰夫、一九六〇、前掲書、一四二頁

(38) 現代漢語においては、「看見」、「聽見」、「聞見」の他に、一般に「夢見」も「V見」型結果補語構造として扱われる。しかし注(36)で述べたように、「夢見」は古語の形態を借用しながら補語構造に偽装したものであり、現代漢語に残留する由來が異なる。したがって、今の場合、「夢見」が視覺に屬するものか知覺一般に屬するものかについて、

結果補語構造「V見」の發生とその變遷

考慮する必要はない。前掲拙論二〇〇一。

(39) 劉月華・蔣文娛・故鞏、一九八三、前掲書、三三二頁

(40) Yuan Ren Chao, 1968 前掲書、四四八頁